

2016年熊本地震で被災されたみなさんに心からお見舞いを申し上げます

4月14日の午後9時26分、16日の午前1時25分を中心にした2016年熊本地震は、その後も余震が繰り返し起き、熊本市民の生活に重大な影響を与えています。京都医労連は、被災されたみなさんに心からお見舞いを申し上げますとともに、現地で奮闘する熊本県医労連はじめ、なかまのみなさんに連帯と激励のメールを送ります。



京都医労連は、4月19日に日本医労連の要請に応え、委員長を現地に派遣しました。委員長は、福岡県医労連の副委員長とともに熊本のなかまを激励してきました。

現地では、くわみず病院、菊陽病院、たくまの里（特養）、くすのきクリニック、グランメッセ、益城町保健センターや加盟組合の事務所を訪問してきました。益城町を中心に倒壊した家屋を目の当たりにし、被害の重大さを認識しました。また、水道・ガスなどのライフラインが機能していない地域もあり、厳しい環境の中での医療機関や介護施設での職員・組合員の奮闘が続いています。

マスコミ報道でも知られているように、多くの市民や職員が、車中泊をしており、みな「疲れがとれない」「でも、家の中にいるよりまし」と言います。「14日の地震の揺れが治まり、ほっとしたところに16日の本震が来て、その後も大きな余震が続く、精神的なダメージも大きい」と。

そんな中で、治療や精神的なフォロー、転院、自宅や避難所への訪問、ガスのない中での食事の手配など、患者や入所者のいのちを守って頑張る組合員・職員には頭が下がります。



現在、「ようやく余震も落ち着き始め、ライフラインも少しずつ復旧し始めています。スーパーにもものが並び始めました。安倍首相は90万食を店頭に並べるといいましたが、着の身着のまま避難している人は財布もなく、困窮しています。必要などころに必要な物資を届けるというシステムもまだ構築されていません。これから長期戦になると思います。みなさんのご支援をよろしくお願いします」（熊医労菊水病院分会のsさん）。

日本医労連・京都医労連は、カンパに取り組んでいます。日本医労連九州ブロックでは、日帰りの「家の片付けボランティア」も開始。熊本のなかまを励ましています。引き続き、震災支援カンパに取り組みしましょう。